
てのひらサイズの童話集 ～現在みっつめ～

たいらひろし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

てのひらサイズの童話集 ～現在みつつめ～

【Nコード】

N1847Z

【作者名】

たいらひろし

【あらすじ】

一話あたり原稿用紙20枚以内におさめた、さくつと読める短い童話集です。週に一度くらいのペースで更新していく予定です。なお、個々のお話につながりはありません。一部、pixivの小説サイドに掲載しているものを転載しております。

第一話 人魚のハープと少年と

人魚のアマレットは浜辺の人気者。彼女の奏でるハープは海の宝石を削って作ったもので、きれいな音色を奏でます。腕のいい奏者、アマレットの名前を、その村で知らないものはいません。今日も漁師さんや、薬売りの夫婦や、子供たちがわざわざ浜辺までやってきて、彼女の演奏にききほれていました。

そんなアマレットに、村の少年、藤吉が声をかけました。

「おまえ、どこからきたんだ」

「私は、ずっとずっと遠くの海からきたの。そこではあなたたち人間の髪の毛、私と同じように金色なのよ」

アマレットがかわいらしい声で答えます。アマレットは自慢のハープをたくさんさんのひとにきいてもらうため、この日本の海へとやってきたのでした。

そんな彼女へ藤吉がいいいます。

「なあ、お前に頼みごとがあるんだ。その楽器を俺に貸してくれないかい。家に持って帰って、おつかあにきかせてやりたいんだ」

アマレットはびっくりして答えました。

「だめよ。とても大切なものだし、このハープは人魚でないとひけないの」

「なら、おれの家へきて、おつかあの前で演奏してくれねえかな」

「それもだめ。私には足がないもの。陸のうえを歩けないの。それより、お母さまにここへきていただいたらどう?」

「できないんだ。おつかあは足が悪いんだよ。ここにきたくてもこられないんだ」

「まあ」

足のないアマレットには?足が悪い?ということがよくわかりません。けれど、その場所から動けないということがつらいだろうということとは想像がつきます。

「しかたない。むりをいって悪かったよ」

藤吉は落胆したように丘へと戻っていきました。

その夜、アマレットは波間にたゆたいながら、夏の星座を見あげつつじつと考えました。

「藤吉のお母さまにわたしのハープをきいてもらうには、どうしたらいいだろう」

東の空が白むまで考えて、ふとアマレットはいいことを思いつきました。

次の日、アマレットの姿は村のどこにもありませんでした。村人たちが一生懸命探しましたが、どうしてもみつかりませんでした。

「故郷へ帰っていつてしまったのかねえ」

と、村のみなは寂しがりました。

それから一年がたち、二年がたちました。アマレットがいなくなつてしまったことを除いて村は変わりなく、のどかで平和でした。

少年だった藤吉は、たくましい若者へと成長していました。

彼は広い背中に母親をおぶつて、浜辺への道を歩いていました。母親に海を見せてあげたくなったのです。

「ここにな、おつかあ。アマレットっていう人魚がいたんだよ。あの子が弾く楽器がすごくきれいな音色でなあ」

「お前は本当にその話が大好きだねえ」

穏やかに母親が答えました。

「おつかあにも、きかせてやりたかったんだ。でもそのころおれはまだ小さかったから、おつかあを背負えなくなつてな」

藤吉が残念そうにいったそのときです。浜辺のほうから、なにやらにぎやかな音楽がきこえてきました。ハープの弦を弾く音のほかに、笛を吹く音。太鼓をたたく音。まるでお祭りのようです。

「なにごとだろう」

藤吉が不思議に思いながら音のするほうへ向かうと、浜辺にたくさんの人魚がいました。サンゴで作った木琴や貝殻のカスタネット、

竹筒のフルートを使ってコンサートをひらいています。村人たちはその周りに集まって、人魚たちの演奏にききほれていました。

「あ、藤吉だ」

啞然とする藤吉に、そういつてほほえんだハープ奏者はアマレットでした。アマレットはきれいな娘へと育っていました。背も高くなり、金色の髪も伸びていますが、その澄んだ瞳は変わっていません。

アマレットはいいいます。

「あなたのお母さまに音楽をきかせたくって、一度、故郷に帰って仲間たちにここへきてくれるようをお願いしたの。これだけたくさんの楽器があれば、お母さまの住むおうちまで、音が届くでしょう？」

アマレットの無邪気なアイデアは、残念ながら正しいとはいえません。ここは潮風の吹く村。たとえこれだけたくさんの楽器があっても、きっと藤吉の家まで音は届かないでしょう。そのことを、アマレットは知らなかったのです。

でも藤吉はアマレットの優しさがとても嬉しかったのです。それにお母さんは、大きくなった藤吉に背負われて、ここにいるのです。

「じゃあ、始めましょう。ここはとてもすてきな村だから、みんなしばらくここにいてっていつてるわ」

たくさんの観客たちの喝采を受けながら、人魚たちのコンサートは幕を切りました。

彼らは音楽が大好き。

藤吉の村にすればいつでも、遠い異国のにぎやかな音楽が迎えてくれるのです。

第一話 人魚のハープと少年と（後書き）

作者のたいらひろしと申しますm（）m 普段はpixivというイラストサイトの小説サイドで活動をおこなっております。童話やホラー、ライトノベルからエッチな小説まで手広く投稿しておりますので、どうぞご覧くださいませ）・（）【http://www.pixiv.net/member.php?id=1131262】

第二話 坊やのくれたはがき

郵便配達員の中村さんがたくさん郵便物をバイクにつんで郵便局を出発しようとしたところで、ちいさな男の子に呼び止められました。

「郵便屋さん。このはがきを届けてちょうだい」

「うん？ どれどれ」

見ると、はがきのあて先は市内の病院となっています。

「お母さんが入院してるんだ。本当は会いにいきたいんだけど、僕の家からじゃ歩いていけないだよ」

病院はここからずっと北にいったところにあります。市内とはいえ、子供の足では歩いていくのは難しいでしょう。

中村さんは坊やからはがきを受け取ると、明るい笑顔でうなずきました。

「わかりました。なるべく早く届けましょう」

中村さんはすぐにきびすを返して郵便局へと、とって帰りました。そして、まだ局内で作業をしていた竹田さんにも願いました。中村さんは南町の担当。病院のある北町の担当は竹田さんなのです。

「竹田さん。ひとつ、お願いがありました」

そういつて、中村さんは竹田さんにはがきを渡しました。

竹田さんが不思議そうな顔をします。

「うん？ このはがき、消印がついていないじゃないですか」

「お客さまから直接、あずかってきたんです。どうでしょう、やっ
てくれますか」

「いいですよ」

竹田さんはふたつ返事で快諾してくれました。竹田さんはいいます。

「午前中に病院の近くまで配達に行くので、ついでに届けてきます」
お礼をいうとすぐに、中村さんは町中に配るたくさん郵便物を

持ってバイクで出発しました。あのはがきだけではなく、郵便やさんはたくさんの、たくさんの郵便を町中に届けなければならぬのです。

配達中、中村さんはあのはがきのこと気がなくなってしかたがありませんでした。

「竹田さんは、もうはがきを病院へ届けてくれたかな。あの子のお母さんは、もうはがきを読んでくれたかな」

そうして午前中の配達が終わり、お昼休みになりました。中村さんが食堂と向かうと、今度は竹田さんのほうから声をかけてきました。

「中村さん。さっきのはがき、たしかに病院へ届けましたよ」

「助かります」

「では、こんどはあなたの番ですね」

そういつて、すつと差し出された竹田さんの手には、一通のはがきが乗せられていました。あて先は、中村さんの担当の南町となっています。

「？ これは……」

「病院であずかりました。坊やのお母さんからさうです」

中村さんが驚いてはがきを裏返すと、やわらかな字体でこう書いてありました。

『もつすぐお兄ちゃんになる守くんへ。さみしい思いをさせてごめんね。ママは』

そこまで読んだところで、苦笑を浮かべた竹田さんに止められました。

「いけませんよ中村さん、お客さまのはがきを読んでは」

「これは失敬。それにしても、ずいぶんはがきの返事が早いですね。今日の午前中に届いたはずなのに」

「お母さんもおなじタイミングではがきを書いていたらしいですよ」

「ああ、なるほど」

どうやらメッセージを届けたいと思っていたのは、坊やだけでは

なかつたようです。

お昼休みが終わり、中村さんははがきをかばんへしまつと、うきうきした気分でバイクにまたがりました。

さあ、笑顔を届けにいこうか。

坊やの家へ向かう途中、大きな桜の木とすれ違いました。春の風に舞う薄桃色の花びらが、まるで暖かな雪のようでした。

第二話 坊やのくれたはがき（後書き）

作者のたいらひろしと申しますm）（m 普段はpixivというイラストサイトの小説サイドで活動をおこなっております。童話やホラー、ライトノベルからエッチな小説まで手広く投稿しておりますので、どうぞご覧くださいませ）（）【http://www.pixiv.net/member.php?id=1131262】

第三話 ふたりの天体観測

『こんばんは、タマキさん』

昭夫がパソコンに文字を打ちこむと、すぐさま反応が返ってきた。

『こんばんは、アキオさん。今日は早いですね』

タマキさんだ。昭夫が彼（あるいは彼女）とこうして文通にも似たメッセージのやりとりを始めてから、もう半年になる。昭夫は、この？タマキ？と名乗る人物が大人なのか子供なのか、どこで暮らしているのか、男性なのか女性なのかも知らない。タマキさんとはインターネット上で、ふとしたきっかけで知り合った。タマキさんの知的で優しい人柄に惹かれた昭夫は、知り合ってから半年、ずっと交流を続けている。

昭夫は蛍光灯の下、慣れない手つきでキーをたたいた。

『ええ、仕事は早めに切りあげました。なにしろ今日は、エクストリーム・スーパームーンの日ですからね』

『？ なんですか、それ』

『一八年に一度、月が地球に最接近する非常に珍しい日なんですよ。今夜は満月ですし、きつと月がきれいにみえるでしょう』

『どれどれ。あ、ほんとだ。いまベランダで、月を見ながらケータイを使ってこのメッセージを送信しています。月がとても大きくて、きれいに見えます』

『そうですね。僕は天体観測が好きで、この日のために、新しい双眼鏡まで買ったんですよ。ニコンっていうメーカーの』

と、そこまで文字を打ってから、昭夫はふと、タマキさんはこの話題に興味があるのだろうか、と心配になった。

『すみません、ひとりではしゃいでしまっ』

『とんでもない。アキオさんに教えていただけなかったら、きつとこの夜を知らずに過ごしていたと思います』

怒ってはいないようだったので昭夫はほっとしながら、言葉を続

けた。

『では、ちょっと早いですが、おいとまします。僕も月を眺めたいもので。また明日、ゆっくりお話ししましょう』

『ええ、また明日』

そのメッセージを最後に、会話のやりとりは終わった。昭夫はパソコンの電源を落としてからアパートのベランダへ出た。

やわらかな月光が昭夫を迎えてくれた。

三月の風が街路樹を優しく揺らす。街は銀色に照らし出され、夜がほのかな光を放っているようだった。

ふと隣のベランダを振り向くと、隣室の老婆がベランダに出ているのが見えた。昭夫はその老婆とは、あまり会話を交わしたことがない。せいぜい、ゴミ出しのときに顔を合わせた際、あいさつをかわすくらいの仲だった。

「こんばんは」

昭夫が声をかけると、

「こんばんは」

はにかむような笑顔で老婆は笑った。そして、どこか得意げな口調でいきってきた。

「ご存知ですか。今日は、ええっと」

そういつて老婆は手元に目をやった。昭夫は、おや、と思った。

彼女の手には、老人には似つかわしくない、最新式のケータイが握られていた。

じつと画面を眺めた老婆は、やがて満足げに顔をあげた。まるでいま知った知識をひけらかす子供のようには昭夫へ語りかけた。

「そうそう、エクストリーム・スーパームーンだそうですね」

「ええ、月がとても大きく見えるんですね」

老婆が不思議そうに目を細めた。

「あら、ご存知でしたの」

「天体観測に興味がありますね。このとおり、双眼鏡も用意してあります」

「まあまあ、ご用意のよろしいこと」

そういつて老婆はにっこりと笑った。品のいい笑顔だった。

彼女に好感を抱いた昭夫は、ベランダのサッシから身を乗り出して、右手の双眼鏡を彼女へと差し出した。

「よかつたらどうぞ。月がよく見えますよ」

「これはどうも」

そういつて、老婆はうれしげに双眼鏡を受け取った。おぼつかない手つきで双眼鏡を顔に当てようとした彼女の目が、その双眼鏡へ注がれる。

「ニコン……?」

「? どうかしましたか?」

「いいえ、なんでも」

彼女は「よつほど有名なメーカーなのかしら」とつぶやいてから、双眼鏡を覗きこんだ。

「わあ、きれい……」

「ええ、本当に。ふたりで見る月は、格別にきれいですね」

日本のどこかにいるタマキさんも、この巨大な月を見ているのだろうか。

一八年に一度の夜空を仰ぎながら、昭夫はそう思った。

第三話 ふたりの天体観測（後書き）

作者のたいらひろしと申しますm）（m 普段はpixivというイラストサイトの小説サイドで活動をおこなっております。童話やホラー、ライトノベルからエッチな小説まで手広く投稿しておりますので、どうぞご覧くださいませ）・（）【http://www.pixiv.net/member.php?id=1131262】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1847z/>

てのひらサイズの童話集 ~現在みつつめ~

2011年12月18日23時54分発行